堀秀成著

音圖畧說 全

811.1
H647o2
W

077031-000-1

811.1-H647o2

音図略説

堀　秀成／著

M11.3

DAC-0213

811.14 H 64702

貴重

堀秀成先生著

書圖畧說

臨川堂藏版

定價金拾五錢

国立国会図書館 26.10.10

244912

うみうりなきに水をまとめつ早川
よりまたの形もやうはのもとをも
きえ形をうしなひ文字をうつす
よりもしまの形とハ誰やしら人うの和
らをきをうつす筆法もとも
をきをえて及ばぬ事も
なしとハ形をうつす人の志ひるもなる
を筆畫間のうつすハ未まる流ひ

いで夫極むつきことなくもなき所
妙なれは何に依れ古典の学
は古言よりこそ古言のその
本の義より極めていへるの
ぬるを那須手にての能はかしのそ
該本とある古言の義を極む
本をきたるにもたるはいふ其本
ありて未たなきものあらかし

然れは言の本を極むる学は既に
音圖大全と名つくる一枚
の刷を著し次て此れ圖の
略説を何ふかしたるに其のことを
國下足柄郡小舟の里の農民
中村信治といふ者なるものと
何ふりよりてやゝのて何くへ里
ありけれはいふことものありけるやうの

ほの聞の樂ごゝ屬きれのこゝ巻よ
以ての意と いまこゝ樂の源をとゝ
て聲の形のすゝ意ゝ れよりおのゝ
學ぶ弟子多きよみ
明治の十五年百

堀亨

音圖畧說目錄

緯

開合第一
對音第二
縮張第三
輕重第四
聲息第五
通音第六

經

昇降第七

氣活第八
音起第九
五大第十
幽音第十一
内外息第十二
濁音第十三
各異第十四
活語第十五
去來第十六
以上十六目

竹村

音圖略說

藤原秀成著

音圖の委しき事ハ既ゐ著しゝる音圖大全解ゐ據りて知るべし今其概畧を記をて初學の階梯とす

○開合第一

開口音

合口音

舊說ゐ有久須都奴不牟由流宇の一段を合口音として其他四段を凡て開口音とせり然るときハ於乎伊韋衣惠等の開合の差別もおくゐ空も粗漏あゐまとあゐしを近頃太田方

が漢吳音圖ゝ有韻の一段と和音の一行を合音と爲さるハ舊說ゝ校べてハ聊詳ゝ似て猶竭ざるおとゝあり然るを富樫廣蔭初て阿加佐太那れ五行を開とし波麻夜良和の五行を合として開合の說極きり然れども今一段委しく云ハゞ開中ゝ開合合中ゝ開合あと然らざきバ開合の微細を竭すおとあとそばそハ次ゝ云ふべし

開中開　久
同小合　須
同開　都
同合　奴

開中開音ハ全開の音也同小合ハ同合ゝ校て小この緩ゑとゝる貌あるを開中合とあるハ波行以下の合音ゝ類ひて開中の全口音也

合中開　不
同合　牟
同小開　由
同合　流

合中開合の次第ハ開中開合に次第ゝ准て知るべし斯て開中ゝ開音二行合中ゝ合音二行又開中ゝ小合一行合中ゝ小開一行ありて反對せと又開中ゝ全合音一行あと合中ゝ全

開音一行あり此二行開合の順次ゐ因ヒて開中の合い開音の末ゐ位し合中の開ハ合音ハ初ヲ位せるゑとをよく辨ふべし但此開合ハ父音有久須都奴不牟由流宇一段ハ以て規矩として其他阿伊衣於の四段も此ゐ准ふ然れども阿伊衣於の四段ハ母音の開合ゐ牽れて自然細差をおにものあり よく呼び試ゑて知べし

○對音第二

因伸舌　有
因發舌　久須
因舌斷　都奴
因舌唇　不牟
因收舌　由流
因縮舌　宇

此外音内音相分て去のも其中ゐ反對をゐせるゐて先阿行の有と和行ハ宇ハ一音づゝ反對し以下ハ二音づゝ相接て反對せるゑと二音づゝ相接て比類せるゑと也有音の因伸舌と宇音の因縮舌と始終ゐ位して反對し外音中ハ久須ハ音の因發舌と内音中の由流の音ハ因收舌と反對せり外音中ハ都奴の音ハ因舌斷と内音中乃因舌唇ヒ内外と相分て比類せり

冬日氣の地中に潛伏せるハ屈也春日氣の地上に發生するハ伸也天地間屈伸あらざるハあり

尺蠖之屈以求信也龍蛇之蟄以存身也精義入神以致用也

○縮張第三

縮張

事に屈伸あり物に縮張あるハ自然の理にして天地の眞理をそなへさる五十音あれバ必らずこれ理あくバあるべからずそハ先縮張の本ハ阿行有と和行宇との反對にありて阿行有と五十音ハ本にて因伸舌をあぢて張也和行宇ハ五十音の末にて因縮舌とあぢて縮也のくて事に屈伸あぢてそれ本ハ生と死の二にあり生と伸の甚しきもの死ハ屈の甚しきもの也然るに阿行の有ハ生ハ息和行の宇と死ハ息に

ることを思ふべし斯てまた久音より以下次第に推して各の音義と校べ試みを知るべし假令バ久音ハ引縮る舌に因りて生れる音あるバ則縮あるを須音ハ衝出舌に因りて生れる音あるバ則張あるを以て他ハ准へて知るべし斯て奴音ハ張より縮に至り不音ハ縮より張に至る義あり此二音と一音に縮張を兼さりて奴音ハ平らに和きたる象にあぢて張の音ある故此音にて開音盡終る義あれバ自然遂に縮む貌をあせるをもて一音にして張より縮に至り不音ハ合する象ありて縮みとる音あるをその合せ含みとる聲息の遂に張り出て廣がる象をなせるをもて一音にして縮より張

ゐ至るゐをよく呼び試えて知るべしさてまゝ開音ハ生の縮ゐ足の張ゐ合ひ合音ハ此ゐ反して足の縮ゐ生の張ゐ合へるゐとハまづ開音を譬へゞ春夏の如く開き進む理を具ゑるゐ音なれゞ物の發生するゐ縮えて漸長成せゞとする氣を内ゐ含えて生るもゆゑるゆ弥成長するゐ至りてハ長をるまゝゐ氣を外ゐ發して張るものあれバ生の縮ゐ足の張ゐ合へるゐと勿論あり斯て又合音ハ譬へゞ秋冬ゆ如く閉退く理を具へゑる音なれバ合音の足を充實成竟て終ゐ根本ゐ還らむとする足あゑゞ足ゆ縮ゐ合へりさるハ此縮物の發らむゞしてまづ縮める方の縮ゐハあらゞ成竟勢氣盡て縮む方の縮あれバ也又生の張ゐ合へるハゐく充實成竟さるうへハ再び發らむとする催ゐ至るべき理あれバ生の張ゐ合へる也但此合音の生ハ表ゐ顯ゑさる生ゐハあらでいまゞ裏ゐ隱れさる生あるを思ふべし

○輕重第四

輕

重

開音ハ輕く合音を重し呼び試えて知るへしさるハ開音ハ其聲息の口外ゐ散るゐゐゐ輕く合音ハ其聲息の口内ゐ止るゆゐゐ重きあり又生の輕ゐ足の重ゐ合へるゐと必ず

244912

然あるべき理也そハ物の發生するハ清く輕き貌あるを成足するハ漸重濁の貌あるものゑれど也

○聲息第五

舌根　久
舌本　須
舌中　都
舌末　奴
唇外　不
唇内　牟
舌末　由

舌本　流
舌根　宇

久音舌根より次第ゑ外の方ゑ進ミ運びて遂ゑ奴音の舌末ゑ及びて開音盡き次ゑ不音ハ唇外より次第ゑ内の方ゑ退き還りて遂ゑ宇音の舌根ゑ止る呼び試ミて知るべし故開口音ハ自内及外合口音ハ自外及内とす

○通音第六

通於音初　不
同次　牟
通衣音初　由

同次　流
通伊音初　久
同次　須
通阿音初　都
同次　奴

此ハ合口音ハ於衣開口音ハ伊阿ヨ阿伊衣於の順を逆ヨ下より上ヨ通ひ及ぶを云但内音を先とし外音を後とすることを物ヨ内外ありて内より發る上ホて云ハゞ内の方本とあるて外ヨ至る外より及ぶ上ホて云ハゞ外の方始となりて内ホ至る斯て不牟の二音ハ窄り含ミさる象ハ於音の象ホ

ハとよく似由流の二音ハ舌を動し揭げ舉る象の衣音ハ象ヨいヨをく似久須の二音の舌ハ浮上り進む象ハ伊音の象ヨうハどよく似都奴ハ二音乃高く成竟る象の阿音の象ヨいヨよく似さるをいふ也此於衣二音ハ地内ハ理を具へて内音ヨ通ひ伊阿の二音ハ地外の理を具へて外音ヨ通へるヨと其理ハとも動ざるものあるヨと茂よく思ふべし

○昇降第七

昇降
昇降本及於阿　有
降昇受有係阿　於

昇降（受於係衣）　阿
降（兼昇受阿及伊）　衣
昇（受衣及阿）　伊

此ハ有於阿衣伊と生るゝ音の昇降の息をあーて天地の昇降の氣ふ奇しく合へるを云也そもまづ有音の昇降ハ本とあるハ此音を唱ふる息の膀ふ昇りて阿音を生し顕ふ降りて於音を生す然るふ志ハ有音天地初判の時大空ふ生れる一物ふ合へるゞその一物の二つふ分れて萌騰るものを昇りて天と成りまゝ重く降るもハを泉と成きるゞ則此昇降の本とある意也次ふ降昇とあるハ於音を唱ふるふ息の顕の方ふ重く降りゝるゞ再び上へ蒸上る象をあせり此泉國ハ初降りて成るゞ其泉より常ふ蒸氣の昇るふ合へり次ふ昇りて降とあるハ阿音を唱ふるふ息ハ膀の方ふ輕く昇りたるゞ再び下へ蒸降る象をあせり此天國ハ初昇りて成れるゞ其天より常ふ大氣の降るふ合へり次ふ降とあるを昇とあるを衣伊二音の於阿二音の間ふ有て於ハ地心阿ハ天ふて天より降る氣を地心ハ方へ送り及ーふ合へて氣を天の方へ送り及ーふ合へて

○氣活第八

氣活

萬物本　有
萬物母　於
萬物父　阿
萬物發生　衣
萬物萌騰　伊

此ハ天と地心との産靈ゟ因りて天地間の萬物生活あとの理を有於阿衣伊五音の義ゟ具へさるを云也有於阿三音ハその意明らゟて注するゟ及バゞ衣伊二音ハ其中間ゟ有りて於阿の産靈ゟ據りて萬物ハ萌初萌進む義をあせり其音義ゟ合せて知るへし

○音起第九

音起
初發喉　有
下降頤　於　自有出
上昇腭　阿　自有出
因舌本　衣　自於出
因舌末　伊　衣伸進

初發喉とあるハ有音の内外の氣和合して初て喉ゟ音聲發りいまゞ口内何ゝの所ゟも觸れざるを云次ゟ下降頤とハ其聲息頤ゟ降り重く窄りて於音をあすゝ云次ゟ上昇腭と

ハ其聲息腭ゟ昇り輕く開けて阿音をあすを云斯て又於音の内ゟ含孕さる衣音ハ阿音の蒸下に誘ひゟあひて於音蒸發する其勢ゟ從ひて因舌本衣音生れいで其衣音弥進ミ因舌末伊音と成る衣音元來於音れ内ゟ含るゟとハ衣伊音ハ同音ゟて共ゟ舌ゟよる音ゟる其舌ハ頤の方ゟ依りて口内ゟ隱れゟる即於音の内ゟ衣音を含る狀也又於音を呼る舌の沈む象をゟすハ於音の内ゟ衣音を含る狀ゟて即其證也又阿音を呼ゟ舌の浮上る象をゟすハその含さる衣音阿音の誘ゟよりて萌出むとする狀ゟて則其證也

○五大第十

五大

地　有

地心　於

天　阿

地中氣　衣

空中氣　伊

顯國とハ此地球上を統云古名ゟて有一段の十音の此理を悉く具たるをいふ泉都國とハ此地球の中心ゟある空虛の一大界をいふ古名也但近世三大考靈乃真柱ゟといふ著書あ𪜈て異說を唱へられどもそハ僻ゞ言ある由已別ゟ辨駁せ

るものあり斯て於音の象義は悉く此理を具へたるをいふ天都國といふ天上の一大界をいふ此ハ已ゞ著しくさる天都國名義考ふ悉く盡せり泉平坂とハ地心より蒸發する大蒸氣を地表ふ及す氣脉をいふ古名天八衢とハその地表より蒸發する大氣の大虛空中を進昇る氣脉をいふ古名也ゥくて衣音ハ泉都平坂伊音ハ天之八衢の理ふ其音の象義の悉く合へるを云也凡て此五音の象義乃五大の理ふ奇しく合へるおとハ音義本末考ふいへるを見て知るへし

○幽音第十一

幽音

幽音といふものハ本音の裏ふ隱れて有りとしも知られぬもの也斯て無きもはのと思へハまさしく有ゞて五十音の本源と成れるふ似さるものの也そも今此五十音ハ凡て顯音ふて天地の間は萬物乃名と成り蒼生の言語とありて顯世の用をあすものあるを幽音ハ本音は裏ふ深く止ゞて其分魂を五十顯音ふ寓して其靈とあゞつゝ妙用を宰るもの也されバ諸音とも顯音を放るれバ咸く幽音ふ歸り止るを思ふへし故音ハ顯あれバ有形あれども僅ふ口舌の觸るゝ所ふ象をあして忽ち變り失ふあとを免れば韻ハ顯より幽ふ歸りあく韻あれバ無形ふして變り失ふあとあく長あるも

のあり此幽音のあとハ千載の昔よりいまゞ思ひ得さる人
はなきを已初て發明したるものとなるを猶委しくハ別まい
ふべし

○内外息第十二

内外息
内息
外息

開口音ハてハ久都二音外息須奴二音内息合口音ハてハ不
由二音外息牟流二音内息也外息とハその音を呼ふ息の口
外ニ出るをいひ内息とハ口内ニ止るをいふ内息又入息と

いひ外息又出息ともいふ自身よく口内ニ調練するときハ
出入の息和融して明らかニ知るゝあと也又本音ハてハ於
衣の二音ハ外息阿伊の二音ハ内息有音ハ發息ニて緯ニ宇
音と相對して發と收と也斯を外息ある於衣二音ハ重内息
ある阿伊二音ハ輕ある あとを大氣の上下厚薄ある ニ肖さ
る也そハ大氣地球上を重く稠厚ニて虛空高き所ハ稀薄ニ
さバ也さるを地球ニ近き所若し稀薄ある と紀を動物その
氣を呼吸して長成するあとのあなゞ虛空高き所稠厚ある
ときハ日光を徹して萬物を照らし養ふあとかあをねバ也
於衣音を蒸發の息重く力あるて稠厚ある ニ阿伊音ハ蒸下

す息輕く力なくて稀薄なるあと呼試て知るべし

○濁音第十三

無有濁音　本音

濁音ハ三ツの狀あり合唇觸鼻彈舌是也合唇とハ口を開きて呼音を濁るときハ唇を合をるをいふ觸鼻ハ空を濁りて呼とき其息三分の一鼻より漏るゝを云ふ彈舌とハ濁るを呼ハ舌を必らず舌を彈く狀をあす茂云ふ此三狀の中合唇ハ濁音の主なるゝ素より合唇ハ濁るへきやうなけれバ合口音ハ濁音あるあとあり但波行を合中の全開音なれば濁音とある然ればバ開口音ハ統て濁音ともあれとも奈行のミ濁

ハ輕ク　多ハ重シ　脫ハ輕ク　放ハ輕ク　退ハ重シ　避ハ輕ク　下ハ重シ

るあとあきハ開中の全合音なれバあるを合中の全開音の濁音となるゝ合せてあるへし斯て本音を濁るへき開音ハ初ゝありて濁らさるを諸音の分生をる本音ゝて異なる音あれバあるを

濁强其意　加行

此ハあの加行ハ音濁るときハ清音の意ハ今一際强くなる音あるを云譬バ清てあらぐるといふときハ物の自然白く成る意あるを濁りてあらぐるを云へハ物を態と白くするあとよて其意重く强し又おぐるといふをきハ物の自然ゝ與るあとあるを濁りておぐるを云へバ態と其分を越え

て上ゐいづるおとゝありて強し又とくやいふときハ物の自然利おとゝあるを濁りてとぐやいへバ態とものを利するおやおて重く強しおを其例ハやゝ多うるを准へて知るへし

濁通都音　佐行
濁通奴音　太行

佐行の音を濁るときを其意都音太行の一行ハ義ゐ通ひ太行ハ音を濁るやゝ知ハ其意奴音奈行の一行ハ義ゐ通ふをいふ

帶濁重　奈行
帶濁輕　麻行
帶濁輕輕　良行

此ハその音質ゐ素より濁聲を帶びさるをいふ故鼻を塞きてを此奈麻二行の音ハ呼ぶさおをもてあるべしそハ往ゐいへるおとく濁音ハ其聲三分の一鼻より漏るゝものあるゐ鼻を塞きてハその聲ハ漏るゝゐ滯れハあ已斯て奈行ハ麻行ゐ對て重く麻行を奈行ゐ對て輕し良行を又麻行より輕し然れとも奈行麻行の例あれバ良行の音ハ奈行ゐ通ふおとあり別ゐ云ふへし

○各異第十四

單行　阿行

此ハ他の九行ゐ比類せさるをいふ斯てその比類せさるが

五條あり一ハ此の行活用の語とあるあ空あ丨但詞ハ衢ハ得といふ言を此行ハ活用とせられとるを誤なるあと已ゞ著丨とる日影蔓といふものゐゑへり二ハ此行ハ音一音ハて言ハあるあとあし三ハ言ハ中下ハ屬くあとあ丨四ハ此行の言ハ上ハ他の言乃屬くときを此音ハのづから省るゝ例あり五ハ濁音ハ變るへき開音の初ハ有りなゞら濁るあとなし此五條則他九行と大いハ異あり

男統　物音　加行

男統とを麻行の女統ハ對べて男の名称ハ此行の音を用ゐ女の名称ハ麻行ハ音を用うをを「ひこ」「ひめ」「ねき」「ねみ」「ね」を

とハ「をとめ」「のむろき」「のむろみ」などのはとし又物音とハすへて物の音ハ此行と太行半行又輕くとハ譯ををいふをを金を打音ハチン太鼓のドン系のツシテントン柏子木のカチあどを初をべて此二行ハ譯丨ひふあとあるをみづからうつ丨試ゑて知るべ丨

自然語轉使然語　佐行

自然語の轉りて使然語ハ活用ときい此行ハうつるをは燃もゆと自然語ハ活用を使然語ハ云ふやきをもやさもやしもやすもやせとうつりをたらくゞ如し猶いをゞ流れあゞるのなゞさあゞ丨あがすなゞせとあり明けあくの向かさ

あゝ〜あゝのすあかせとあるゞごとし

第一强音　物音　太行

此行五十音中第一强音あるをいふ物音とハ加行の下ゟいへるゞ如し

第一弱音　奈行

此行五十音中第一の弱音あるをいふ

内音本音　物音輕　波行

此行内音五行の中ゟ本音乃義あるをいふ然れハ自然阿行ゟ類ひ似ゝる狀ありて言の下ゟつくときハ阿行の音ゟ小サ

の紛るゝ貌あ𪜈又物音輕とハ加太二行ゟ校べて物ゟ音オトを

譯すゝとの輕をいふそハ笛の音をうゝーてヒイフウ物ニッ合ふ音をハタ〳〵木葉あどゟ散る戔ハラ〳〵あどの如し

女統　通志支久　麻行

女統とハ加行の下ゟいへるゞ如し又通志支久とハ此行の活語の志支久ゟ活ゟ轉るもあり志支久の活ゟ此行ゟうつるもありて互ゟ通るをいふそハ貴ミたふとむめたふとーたふときたふとくゞうつり恨ミうらむのうらめーうらめーゟうらめしくとうつ𪜈廣ーひろきひろくのひろめひろむとうつれるゞ如ーあゞいと多く枚舉ゟ遑あらぬ

四五通發收　夜行

四五とを此行四五の音也ゐとまて則延以の二音をいふそハ有於阿衣伊の分生乃順次ゐ從へバ由与夜延以とあれバ也斯て發收とあるハ阿行と和行の古とまて此夜行の延以の阿和二行の衣慧伊韋ゐ通ふをいふ其通ふと云所以ハ別ゐ委くいふへし

使然語轉自然語　助音　良行

使然語の轉りて自然語ゐ活用形ときハ此行ゐうつるをハ當てあつと使然語ゐ活用を自然語ゐ云と和をおたらあたりあたるあたれ空うつり活くゐおとし猶いをゞ傳へつたふのつたむらつたをつたるつたれとあり弘めひろむひろまらひろまるひろまれ空なるゐ如し又助

音とハ此行の音意ゐくして唯助ゐ添る例ありそハ貴きろ野ら君らゐどの類也又体言を二音までゐ限るを此行の音添りてハ柱薫袋霰ゐど三音ゐあれるもあるゐ如し

阿行反對　和行

此行ハ阿行ゐ反對して發收大小本末始終ゐどの義あるをよく按ふへし

○活語第十五

活語依此韻轉　阿韻

諸の活語とも他行ゐ轉り行くゐハ此一段の音ゐ轉りて其一音を持てうつり畜くを云譬ハもそもゐと自然の語ゐ活

くを使然の語ゐ轉りてもやしもやすとあるときハ則ち此行のや音ゐ轉りを即そのや音を持て佐行ゐ轉りゆく又あてあつと使然の語ゐ活くを自然の語ゐ轉りてあたりあたりとあるときハ此行のた音ゐうつりて即そのた音を持て良行ゐうつりゆくが如しいづれの活もおれゐ准へて考るべし

活語依此韻居　伊韻

活用の語此一段の音ゐて云居るときハ体言とあるをは霞まむあすむあど活く語をおの段ゐのすみと云ときハ霞といふものゐなりて則ち体言とある又けむらけむるなど活くを此段ゐてけむりと云ときハ烟といふものゐありておれも体言とあるが如し

活語依此韻定　有韻

諸の活語とも此段ゐて現在の意とありて則その語ハ定るを云

活語依此韻令　衣韻

活用の語此段ゐてハもハを令をる意の語とあるを云

活語無及此韻　活語依此韻有轉　於韻

諸の活語ともゐ此段まで活用の及ぶゐとあきをいふ亦上二段活ハ此韻より轉るゐとありをハ亡びほろぶと活く語

のわろばさわろば―わろばすをろばせと轉るが如し餘ハ准て知るへし上件ゑいへる五段の意を猶いをゞ阿韻の一段ハ諸の活語とも他行ゆうつるとき此一段の音を持てう つりゆくをとハ阿音天理を具へさる音あきばあり次ゑ伊韻の一段ゑて活語の体語とあるをとハ伊音天八衢の理を具へとる音あるゑ天八衢ハ大氣の充滿たる所あれハ此音ものゝ滿足る意ありて諸事ハ定まる義をあせりさきゞ活語の此一段ゑて用の体とありて定る例なるを思ふべし次ゑ有韻の一段ゑて諸活語ゑも現在の意とあるて定るをとを有音顯國ハ理を具へたる音あるゑ顯國ハ則人の住める地球上を云あれバ即諸活語とも此一段ゑて目前の意とあるゞよく合へり次ゑ衣韻の一段ゑて諸活語の令する意ゑなるをとハ衣音泉平坂の理を具へさる音あるゑ泉平坂ハ地上より地心へ及ふ位置あれバ此方の意を彼方ゑ云仰せむと下令をるゞよく合へり次ゑ於韻ハ一段ゑ諸活語とも及ぶあとのをきハ於音泉國の理を具へさる音あるゑ泉國ハ地心の一界なれバ此顯國ハ人乃用語ハそをゑ至らざる理ゑなれア千万言中唯一言來と云詞のこ此段の音あれどもあえ變格あり

半語　阿韻

此ハ阿韻の一段ハ音ゑて全く語をあさゆを云譬ハゆかさ

いたゝあむふまゐちあど此一段の音ハ語をあさぬを助辭を懸けてゆうむゆうずゆうまーさゝむさゝびさゝまーあどいひて全き語とある餘ハ准て知るべしあを此一段天國ハて萬の事皆天より初るを其我地上ハ受けて全く成る理ハ合へるもの也

續　用　伊韻

此ハ伊の一段の音より用の語ハ續くをいふ譬ハゆき渡るゆきすぐるさーるさるさし放るあどの如ー餘ハ准て知るべーあを此一段ハ天より地ハ續く位置の理ハ合るもの也

斷　兼續体　有韻

此ハ有韻の一段の音ハて斷れて止るを云譬ハゆくとけあどの如ー又体言ハ續く格を兼てゆく人さす月あどゝもなる餘ハ准て知るべーあハ此一段顯國ハて顯國の大虚空中ハ斷れ放ヒて在るハ合へるもの也又萬物ハ皆顯國ハ地上ハあるもけあるハ此韻より体言ハ續く格を兼るハ合へり

續　用　衣韻

此ハ衣の一段の音より用の語ハ續くをいふ譬ハ明ヒさる解かくあどの如ー餘ハ准て知るへーあハ此一段地中氣ハて地中氣脉ハ顯國より地心ハ續く理ハ合へるもの也

失語　於韻

此ハ於の一段ハ音乃諸ゐ活語をあさゞるを姑くいふ也

去來第十六

未然

過去

現在

已然

未然芽

未然より以下凡て五段ハあとある義おけれバ注をるまで

もあらぢされどあゝふゐへるハをべて所謂四段の活ゐ例

をもて云ふ猶上二段下二段一段あどの活用もありてそも

此五段の例ハ異るものゝら活語ハ四段ゞ本ゐて其他の活

ハ四段よりうつりゝる末あれバ今此ゆハ四段の活用を則

とゝていふあれらゐあとハ已ゞ著ゝたる活用本義考ゐ委

ゝくゐへるを見て知るへし

音圖略說畢

版權免許 明治十一年三月八日

著述人 茨城縣士族 堀秀成
東京赤坂一ツ木町四十四番地住

出板人 神奈川縣平民 中村信治
神奈川縣相模國足柄下郡千二百二十五番地小船村住

東京芝三島町 山中市兵衛
同日本橋通四丁目 金花堂
同兩國藥研堀 報知社
同日本橋通二町目 小林新兵衛
同大傳馬町三町目 東生亀次郎
同鍛冶町 紀伊國屋梅次郎

賣弘